

東日本大震災における福島県の子どもたちの経験—第2報— ～原発事故による行政避難を受け入れた地域の子どもたちの語りから～

小清水和美¹⁾・工藤宣子²⁾*

¹⁾藤枝市立瀬戸谷小学校

²⁾千葉大学・教育学部

Experiences of Children in Fukushima Prefecture After the Great East Japan Earthquake -Second Report-

—From the Story of Children in the Area, Who Accepted the Suffering People and the City Function Entirely That Was Damaged by the Nuclear Accident; Administrative Evacuation—

KOSHIMIZU Tomomi¹⁾ and KUDO Noriko²⁾*

¹⁾Fujieda City Setoya Elementary School

²⁾aculty of Education, Chiba University, Japan

避難した子どもたち並びに避難先の子どもたちの個別の経験を明らかにし、今後災害が発生した際の子どもたちへの必要な支援や介入についての示唆を得ることを目的として本研究を行った。本報では、避難先の子どもたちの経験について報告した、原発事故の影響で避難した子どもたちを受け入れた地域に居住していた、震災発生当時中学2年生、調査時20歳の3名を調査対象者として選定し、インタビュー調査を行った。インタビューデータを解釈学的現象学に基づき質的に分析した結果、個々の価値観及び人生観に基づき語られた固有の経験が明らかになった。

キーワード：東日本大震災 (The Great East Japan Earthquake), 原子力発電所事故 (Nuclear power plant accident), 受け入れ (Accept the administrative evacuation), いじめ (Bullying), 解釈学的現象学 (Interpretive Phenomenological)

I. はじめに

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災は東北地方において甚大な被害をもたらし、中でも福島県内では東京電力福島第一原子力発電所（以下原発）事故の影響などにより、避難指示が出された区域内外から多くの住民が避難を強いられた^{1,2)}。復興庁のデータによると、福島県の避難者はピーク時には約16万5千人を数え、震災発生から1年後の2012年3月末には62,700名の県外避難者が報告されている^{3,4)}。

当時、神奈川県や山梨県の中学校で発生したいじめなど、原発事故の影響で避難した子どもたちへの偏見や差別の問題が報道で連日取り上げられ^{5,6,7,8)}、発災翌年度におけるいじめの認知件数は、前年度の約2.8倍に増加した⁹⁾。

近い将来、首都直下型地震や南海トラフ地震が発生する危険性が高まり、避難した子どもたちと、避難を受け入れた地域の子どもたちに同様のトラブルが繰り返される可能性が危惧される。そこで、避難した子どもたち並びに避難先の子どもたちの個別の経験を明らかにし、今後災害が発生した際の子どもたちへの必要な支援や介入についての示唆を得ることを目的として本研究を行った。本研究では、福島第一原子力発電所があった町で被災し、県内の他市に避難した中学生を“避難した子ども”、発

災前から避難を受け入れた地域に居住していた中学生を“受け入れ側の子ども”として、双方に震災発生から高校生活までの経験についてインタビュー調査を行なった。本報では、原発事故による行政避難を受け入れた地域の子どもたちの経験について報告する。

II. 用語の定義

A町：福島県の浜通りに位置し、震災発生当時福島第一原子力発電所があった町

B市：福島県内でA町の行政避難を受け入れた地域避難した子ども：

東日本大震災における福島原発事故の帰還困難区域（A町）で被災し、県内の他市に避難した中学生受け入れ側の子ども：

発災前からB市に居住していた中学生

※“避難先の子ども”という表現を用いると、避難した人たちに主眼を置いているという印象を与えかねないと判断し、B市の調査対象者が、自分たちを指す言葉として使用していた“受け入れ側”という表現を採用した。

*連絡先筆者：工藤宣子 n.kudo@chiba-u.jp

Ⅲ. 研究方法

1. 調査方法

(1) 調査対象者の選定

調査対象者は、福島県内でA町の行政避難を受け入れたB市に発災前から居住していた3名である（各調査対象者のプロフィール参照※年代は震災発生当時のもの）。調査対象者の選定条件として、①震災のことについて質問をした際、判断力があり自由意思で（保護者の同意の必要がなく）研究に協力できる20歳以上の者、②震災後中学校生活を1年以上過ごした者、の2条件を満たす者とした。したがって、震災発生当時中学2年生、調査時20歳の者を選定した。ボランティア団体の知人から調査対象者の紹介を受け、その後縁故法により調査対象者を拡大した。

(2) 調査時期および調査場所

調査は、平成29年1月から3月に実施した。また、必要に応じて追加の調査を平成29年11月から12月に実施した。実施場所は調査対象者の負担とならないよう、それぞれの対象者の提案を受け、プライバシーの保護に留意して決定した。

(3) 調査方法及び調査内容

インタビュー調査は、①震災発生時の様子について、②避難の有無や避難場所での様子について、③A町民が避難してきたときの様子について、④学校再開の様子について、⑤震災後の中学校生活の様子について、⑥高校選択時の様子について、⑦高校生活の様子について、の7項目を軸に、半構造化面接法にて行った。

2. 倫理的配慮

調査対象者に対し、研究目的や方法、倫理的配慮などを記載した研究計画書及び研究協力依頼書を提示するとともに口頭で説明し、書面にて同意を得た。また、インタビュー調査にあたり、インタビュー内容のICレコーダーへの録音及び筆記の許可を得た。なお、研究計画は、千葉大学教育学部生命倫理審査委員会による承認を受けた。

3. 分析方法の選定理由並びに分析方法

本研究では、個別の経験がデリケートな問題を含み、先行研究が少ないということを考慮し、解釈学的現象学に着想を得て開発した独自の分析方法にて分析を行った。

解釈学的現象学研究とは、日常生活においては覆い隠されて取り残されている「生」の根源的な問題を、色濃く体験している人の経験の意味を解き明かすことについてその原理の理解に迫り、支援に役立てることを目指す作業である¹⁰⁾。ここでいう体験とは、たまたまその人だけに起こり、世間の人々とは何の関係もない偶発的な出来事ではなく、どんな人にも起こりうる人間の普遍なことがら、濃縮された形でその人に体験されていること意味するとされている¹¹⁾。

本研究では、以下の4つの手順で分析を行った。(表1) 分析過程の例は表2のとおりである。

表1 分析手順

<p>手順1：録音した発話を、感動詞や言いよどみ等も含め、文字データとして再現し、逐語録を作成する。その後、逐語録をもとに意味のあるまとまりごとに区切り、表を作成する。</p> <p>手順2：逐語録を時系列に並べ直し、「震災発生から高校卒業まで」の時期に関する逐語を抽出する。</p> <p>手順3：</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 客観的に状況を把握するため、背景となる状況を整理する。「背景となる状況」とは、【身体的】、【社会的】、【心理的】状況の総体である。それぞれ、【a1. 身体的（医学的）状況：どのような（身体的状況などの基本的属性の）人が】、【a2. 社会的（福祉的）状況：どのような環境（家族や職場などの社会学的状況）のもとで】、【a3. 心理的（精神的）状況：どのような心理状況下にあるか】とする。 ② インタビューの発話の中で語り手の「背景となる状況」が語られていた場合には、逐語録から抽出し、①と同様にまとめる。加えて、インタビュー以外で知り得た情報や、インタビュー時の本人の様子も記述し、客観的に情報を把握するための補填とする。 <p>手順4：逐語録化された語りを、手順3による客観的な状況を参考にし、本人の立場に移し替えて解釈する。この過程は、解釈学的現象学における「還元」に相当する。その際、注目した言葉と、解釈の根拠を表に明示し、論証する。</p>
--

Ⅳ. 結果及び考察

本報告では中学校及び高校生活についての経験が語られた箇所を抜粋し示した。実際の発話を枠内「斜字」で示し、続けて解釈学的現象学に着想を得て開発した分析にて解釈した結果（以下【還元の結果】）を記述した。特にその時期の心理的状态が示されている箇所をゴシック体として示した。なお、インタビュー時間は44～45分（平均44.7分）であった。

1. 【調査対象者d】の経験

〈プロフィール〉

- ① 性別：男性
- ② 家族構成・同居の親族：母、姉、本人、祖父、祖母
- ③ 語られたストーリーの背景：

震災発生当時、部活の仲間とカラオケにあり、発災後、祖父母のいる自宅に帰宅し当日中に家族と合流した。一週間ほど中学校が休校になり、その間は自宅で家族と過ごした。中学校が再開し、校舎の破損はあったものの、再開後は通常の学校生活を送った。

所属していた陸上部に、原発のあった地区から避難してきた同学年の男子生徒が加入し、家族ぐるみの付き合いとなった。中学3年生の秋には、延期されていた修学旅行で関東地方へ行った。

高校に入学する頃、放射能測定器がB市内各地に設置された。また、仮設住宅も建ち始め、関連する報道を目

表2【調査対象者d】の分析過程の例

調査対象者の発話	背景状況 a1=身体的(医学的)状況 a2=社会的(福祉的)状況 a3=心理的(精神的)状況	注目した言葉	解釈の根拠	解釈 【還元の結果】
発生したときの、俺ら中2、俺ら中2の卒業式か、の時の卒業式が終わって、先輩たちと、遊びに、どっか遊びに、ご飯食べて、カラオケ行ったのかな？部活の先輩と	a1=中学2年生の3月 a2=先輩の卒業式後に、陸上部の部員や先輩とカラオケに行っていた	俺ら	<u>カラオケがタダになった記憶が。あはっはっ。</u> <u>結構ガチめに死ぬんじゃねえかと思いましたね、あっ終わったって…、なんだろ、逃げるに逃げられないみたいなの、立ってられないんで、建物くずれたら、あ、終わりだな</u> ↓ 「カラオケがタダになった記憶が。あはっはっ。」は、笑っていることから気楽な様子にも受け取られる。しかし、一部屋に大人数で入っていたため、身動きが取れなかった状況の中での激しい地震に、恐怖を超えた絶望感を抱いたことから、笑いは弱さを隠すためだと思われる。	先輩の卒業式後、部員や先輩とともにカラオケに行っていたときに地震が起こった。
で、地震起きて、店員さんから帰って、帰っていいよ」って言われて、カラオケがタダになった記憶が。あはっはっ。	a2=自転車でカラオケ店に行った a2=カラオケの料金は無料になった	タダになった記憶があはっはっ		カラオケの部屋には、1部屋10人くらいで入っており、経験したことのない激しい揺れに立ってられず、逃げるに逃げられない状況下で、建物に崩れたら死ぬのではないかと絶望感を抱いた。
やっ、結構ガチめに死ぬんじゃねえかと思いましたね、あっ終わったって…。結構揺れた、揺れて、て…	a2=カラオケ1部屋に10人が入っていた	結構ガチめに死ぬ あっ終わったって		
やっなんだろ、カラオケの部屋、結構1部屋10人くらいで、なんだろ、逃げるに逃げられないみたいなの、立ってられないんで、建物くずれたら、あ、終わりだなみたいになって。	a3=死を感じた	なんだろ 逃げるに逃げられない あ、終わりだな		

にするようになった。

(1) 震災発生以降の中学校生活についての語り

「次の日は、次の日は、がっ、なんかあった気がする、学校あったけど、休みになって、休みになんかあったかな、なんか一週間くらい休みになって。」
「やっ、もうずっと、家族と一緒にいましたね。テレビつけても、なんか津波のことしかやってなかったんで、やー、なんかもうずっと、波がこう来て、家がどんどん壊されているあれを見て、なんか、なんだろ？あー、んー、なんだろ、普通に、かわいそうだなと、同じ県内なのに、なんもう、全然…そうですね、おんなじ、おんなじ県内なのになんか全然なんかこう、被災の仕方が違うっていう。」
「原発に関することは、震災から、一か月前くらいに、や、そんならですかね、二週間くらいすすか、津波の影響でみたいなの。なんか、そんなときはまだ中学生だったんで、なんかもう、あもう部活もできないんだな、外出できないんだなみたいなの。まあ、ほぼほぼ室内で、ほんとに、はい、極力外出ないでって言われたんで。」

【還元の結果】

一週間程学校が休みになり、いつ何が起こるかわからない恐怖から、家族と共に過ごしていた。テレビをつけても津波の報道ばかりであり、家がまたたく間に次から次へと波にのまれ、壊されていく映像を目にし、同じ県

内であっても自分の場所とは被災の仕方が全く違い、かわいそうだと思う反面、現実のように感じられなかった。

震災後、二週間程経過すると、原発事故に関する報道がされるようになった。親や先生に、外出しないように言われ、津波と比較目に見えない放射線については、危険性を実感できず、外出や部活ができないことを残念に思っていた。

「避難してきた人いましたね。なんか、部活一緒に。〇〇くんっていう、すごい、からだか細いっていう、頭がツンツンで、えへ。やもー、全然、一緒におんなじ部活で走ってたんで、ずっと。なんか、すごい足が速いみたいなのを聞いたんですけど、なんか、や、そんな、そんなわけみたいなの、あの体でそんなわけみたいなの、あはは。感じで、接したら、なんか、実際に一緒に走ったら、もうあは、やべーこいつみたいなのかんじで。」
「いや(咳払い)まあ、さい、そうですね、(部活の顧問からは)避難してきたっていうこと、だけは聞きました。そんな深くは…なんか、意外と、意外とみんなすんなりね、うえ〜って。意外と、どんな感じだったろーな、え、なんか、もう、俺、自分が初めて見たときは、朝、朝練、やってて、駅伝の、そんなときに普通にめっちゃ走ってるところで、こうはじめてみたんで、意外と、もう全然打ちとけてるような、あの、部活通して。」

【還元の結果】

陸上部に、C地区（A町が所属する原発に近い地区）から避難してきた同学年の男子生徒が加入することになった。事前に、とても足が速いといううわさを聞いていたが、外見からは想像がつかなかった。しかし、実際に一緒に走ってみると、想像以上の実力に圧倒され、出身地や外見は気にならなくなり、チームの一員として一緒に頑張ろうと思った。

「あと、中学は、(咳払い) その被災してきた子が、修学旅行に來れなかったんすね。んー、なんだろ、修学旅行のお金をなんかもう、一年生のころからちょっとずつこつこつ積み立て、てたと思うんですけど、それがなくていきなり修学旅行ってなって、3月4月くらいに避難してきて、もう5月くらいにはもう修学旅行だったんで、やっぱ、そういう面のあれなのかなーって。修学旅行中に、朝練も一応走った、走ってやってたんすけど、はは。はい、修学旅行中に、ははは、朝、走って、やあもう、普通にその子もいればなーって感じっすかねー。」

【還元の結果】

金銭面の問題を察しながらも、修学旅行中の陸上部の早朝練習で、仲間たちの中にその友人の姿がないことで、寂しさを実感し、残念に思った。

「あ～、なんか、高校になったら、被災してきた人が高校生になったら、なんか、C地区のほうに戻りたいな感じになったんで、いつだろ、まだ寒かったような気がする…なんだろ、なんて言えればいいんだろ？、(咳払い) んー、んー…。なんか、陸上をやりたいみたいな感じで、なんか、結局C地区のほうでじゃなくて、でもなんか、高校は県南地区のほうに行っちゃったんすけど。それにもっと、なんだろ、高校もこっちにいてほしいなとかと思いながら。やーなんか、親と2人ですげー、さみしがったんで、はは、親もすげー仲良かったんで。卒業する前に引っ越したんすけど。んー、んーなんか (咳払い)、みんなでお見送りにいって、すげー泣いた記憶ありますね。」

【還元の結果】

家族ぐるみの付き合いになっていたところに、友人から、高校入学にあわせて地元C地区に戻るという話を聞いた。せっかく仲良くなれたのだから、もっと一緒に過ごしたいと寂しく感じ、B市に残ってほしいと思っていたが、友人の立場を想像し、打ち明けることができなかった。しかし、避難指示区域の解除により、卒業を待たず年明け前に地元に戻ってしまうことになった。部活の仲間たちと見送りに行き、離れがたくて号泣した。

(2) 高校入学後についての語り

「スーッ (息吸う音) やー、(咳払い) 特にはなーいっ

す、高校だと、やっぱもう、ひさ、避難してきてやっぱ別に転入とかしてきたわけじゃないんで、おんなじタイミングで入学して、普通に、普通に高校生活過ごしてたんで…。普通に馴染めてたかんじです。普通に、はい、あの、最初は避難してきたことは知らずに、高校の時は、あのー…。やっ、なんか出身どこ？みたいな感じで、その、一応避難…震災の場所でもみたいな、うすうす感じるみたいな、直接はまあ、言わないんすけど。(咳払い) そーですね、あの、すごい、その避難してきた子が、すごいノリが良かったんで、なんか、なんだろ？特に深い話をしたわけでもなく、なんかもうワイワイワイワイみたいな感じで、女の子なんすけど。」

【還元の結果】

高校にも、クラスメートにA町から避難してきた女子生徒がいた。はじめは、避難してきたことを知らず、自己紹介で出身地の話になったときに言いづらそうにしていた様子から気づいた。特に震災等に関してのことは深く聞かないよう心掛けた。特別視するのではなく、クラスの一員として共に楽しく学校生活を送った。

「でもあれ？高校入るぐらいのタイミングで (咳払い) あれー、なんていうんすか、放射能のあの機械みたいな、測定する機械がなんかめっ、いっぱい。やー、なんかもう、やっ、こう、自分高校ですってとテニス、中学からもやってたんすけど、外でできんのかな？これみたいな。」

【還元の結果】

日常生活においては、高校入学頃、見慣れない放射能測定器が多数設置された光景に衝撃を受けた。長年継続してきたテニスが外でできるのか不安になった。

「(仮設住宅は) このころは建ってましたね、ん、なんか内側はニュースでしか見てないんすけど、なんか、家族が住んでたりしてると、絶対狭いよなーとか思いながら、窮屈だなーって思いましたね。やー、大人、親戚がなんか税金もらって生活するんだろうなみたいなことを言ってる、やー、なんか、な、納得ってつつたらあれですけど、まあ、こうお金ー、などの働くところもないしみたいな、お金ないからって。」

【還元の結果】

仮設住宅の内部は、ニュースでしか見たことがなかったが、窮屈な生活を想像し、気の毒に思った。一方、親戚の大人たちが、避難してきた人たちは税金をもらって生活しているなどと話しているのを見て、働くところもないから、お金もないのだろうな、と思った。

(3) 【調査対象者 d】の経験からの考察

中学校生活で、避難してきた部活の仲間との関係につ

いて、共通の目標に向かいともに体を動かし、触れ合う機会を通して、チームの一員として接していた経験が語られた。原発に関する風評や報道を知る以前に、身近に避難してきた存在ができたことが、大人の影響を受けることなく、人間関係を築いたことにつながっていると考えられる。

また、仮設住宅が設営され、避難してきた人たちは税金で生活しているなどと身近な大人が話しているのを聞いたという経験が明らかになった。帰還困難区域の人だけはより長く賠償金を受け取り、避難者たちの行動の動機はすべて金欲しさだと疑われることがあったとの報告もある¹²⁾。一方【調査対象者d】は、大人の皮肉に影響されることなく、「働くところもないから、お金もないのだらう」と自身の基準で解釈している様子が明らかになった。このことは、避難してきた友人との直接的な関わりに加え、友人が金銭面の理由で修学旅行に参加できなかった経験の影響がうかがえる。

原発事故が起こり、放射能の体への影響を心配し周囲の大人に外出しないように言われた際には、はじめのうちは危険性を実感できず、外出や部活ができないことを残念に思っていた。しかし、放射能測定器が設置され始め、テニスができるかと不安になった経験が語られ、目に見える変化から、自身の生活と結び付けて捉えるようになった様子がうかがえる。

2. 【調査対象者e】の経験

〈プロフィール〉

- ① 性別：女性
- ② 同居家族の構成：母（病院内薬局勤務）、姉（社会福祉協議会勤務）、兄（社会人・関東居住）、本人
- ③ 語られたストーリーの背景：

震災発生当時、自宅で祖母と二人でいた。当日中に家族と自宅で合流した。居住している地域では、道路の変形などにより交通網が遮断され、買い占めによる食糧不足も起こっていた。一方で、学区内では大きな交通網の乱れはなく、翌日から登校できた。学校の隣にある市民体育館が避難所となった。避難所に派遣された姉や、院内薬局に勤めていた母から、避難してきた人たちの愚痴を聞いた。修学旅行は中学3年生の1学期に関東へ行った。

地元の中学生の大半が進学する高校を選択した。高校に入学するころ、B市内には仮設住宅が建ち始めた。高校では部活動を通して、仮設住宅でのボランティア活動に参加するようになった。

(1) 震災発生以降の中学校生活についての語り

「どんどんどんニュースで、なんか津波がどうこうかっていうのは聞いてたけど、まあ山の方なんで、まあ津波は大丈夫だろうって思ったんですけど、なんか、避難の放送も一応は入ったんですけど、うちはその親もいるし、あの、姉もいたの、だからまあ、家を出ることもないだろうっていうので、その日は落ち着いたんですけど」

「あの、その周辺、そのすぐ後ぐらいに、放射能の話が出たじゃないですか。だからその時は、どんどんどん避難区域が広がっていった。」「だから、その時に、ほんとにもうそろそろ避難区域がなってきたときには、関東に行った方がいいよって言われてきたので、なんか、今すぐ逃げなきゃってのがなかったんですけど、まあとりあえず、これからすごい危なくなってきた時に、どうなるのかというのは、ざっくりなんですけど、話が出ていましたね。やっぱり放射能についての知識があまりにもないから、その学校に行く時と帰る時も、雪とかに放射能が混じっているとかも、いろいろ言われたりしてたから、絶対傘持って行けよとか、なるべく早く帰って来いとか、いろいろいろいろ話が広がっていった。んー、なんかたぶんテレビとか、放射能が来てて、その雪とか気候で、県内で放射能が飛び交っているから、まあどこのところから放射能が来ているのかわからないから、そうですね。心配をすごくされていて。学校の先生や親に言われましたね。」

【還元の結果】

絶え間ない津波に関するニュースの映像から、現在最も危険性が高い問題は津波であると感じた。一方で、避難勧告の放送も入ったが、自宅は山の方であり、津波に関しては心配ないと思った。家族がそろっていた心強さもあり、避難することなく家にとどまった。

程なくして報道で原発の問題が取り上げられるようになり、想像以上の速さで避難区域が広がっていく様子に圧倒された。しかし、危険が目に見えるわけではなく、実感が沸かなかったため、今後の対応に関する家族の話し合いを茫然と聞いていた。

雪などの気象により、県内全域に放射性物質が運ばれ空気中に放散しているといううわさが大人たちの間で広がった。教師や親などに、傘の持参や短時間で登下校することなど注意を促されたが、必要性を実感できず、さほど憂慮しなかった。

「まああと食料、そのまあ、周りの人たちも、なんか自分たちが生きること必死だから、買い物行ってもあんまり食料がないとか、そういうのが割とあったので、うん。なんかほんとに、どう生き延びるか、これから先どうなるかわからないし、なんかその、交通機関がやっぱり、県内だけだったらなんとかあるところもあるけど、B市でも道路とかその形変わっちゃったりとかしていたところもあったので、食べ物わりと困っていたっていうか、気を張っていたところではありませんね。」

【還元の結果】

日常生活においては、買い占めによる食糧不足が起こっていたが、道路の変形などにより交通網が寸断され、遠くへ買い物に行くこともできず、支援物資が運ばれてくるかもわからない環境で、危機感を抱いていた。人々は自分が生きること必死になっている状況であり、自

分も生き延びるための方法を苦慮していた。前途を思案し、石油の消費を抑えるため、ペットボトルを湯たんぽ代わりに使用したり、早急に避難できるように準備したりなど、身の危険を感じ、緊張感を持って過ごしていた。

の人のカルテは読みづれえとか。』

【還元の結果】

学校の隣にあった市民体育館が避難所となり、目まぐるしく人々が避難してくる様子に圧倒された。ほかの地域に比べ重大な被害状況ではなかったが、B市の人々も平常心を保てず切迫した毎日を過ごしている中、避難を受け入れる側となった。自分たちも少なからず被災して、必死な状況にもかかわらず、避難所で働く姉から、避難してきた人々の不遜な態度についての話を聞き、不快に思っていた。被災状況から、避難を受け入れる立場になることは理解できるが、避難してきた人々に関するよくないうわさを耳にすると、不快に感じ偏見を抱いていた。

院内薬局に勤務している母は、避難してきた人々の横柄な態度に対し、不快感が底流にある様子であり、普段の仕事が繁忙であることに加え、避難者の来院で仕事が一層増えるという愚痴を聞いた。身内である母親や姉から避難者に関する話を聞き、避難してきた側であるから優遇されるのが当然という避難者の意識に対し、疑念を抱いていた。会話の中でも日常的に「避難民」という言葉が使われたりするようになった。そのような環境下で、自身も避難してきた人に対して好ましくない感情を抱いていた。

「どんどんどん、県中からB市、流れてくるんですね、なんだろう、いろんな人がいるっていう話はすごい聞いてて、なんだろう、例えば、あまり被害は無いにしても、普通の人だって不安だし、生きること必死だけど、避難しないとイケないって人たちよりは、割と良い大丈夫な地域にいるから、避難を受け入れる側では、であったんだけど、別に全てが大丈夫なわけじゃないなか、みんなで支えているのに、なんか、なんだろう、避難してきた方々にご飯とか配る時にお箸とか一緒に配ったりするときに、ありがとうございますって言って受け取ってくれる方もいたけど、お前箸で食うようなもの出せんのかっていう人もいて、それは何なんだろうなって。私の中では別にそんな、うーん、なんか、どうだろう、偏見、うーん、あったのかなあ、でもその箸で食うようなもん出せんのかっていうのは、うーん、割と偏見にはつながってしまっていたのかもしれないね。でもなんかその、放射能がついてるからどうこうとかっていうわけじゃなくて、その、そのなんだろうその、精神面だったり、モチベーションは、そういう人がいるんだなって。そういうこと言ってくる人って、割とその、お家の中だけでお金だったりする人だったりするので。」

「親が町にある病院の薬局の受付っていうか会計とかをやっているんですけど、そこではわりと、ただでさえ人が多いのに、避難してくる人がいて、なんか、仕事が増えるのにみたいなの、あとなんかめんどくさい人が多い、こうしてくれのああしてくれの、なんか、被害者意識を盾にしているっていうか、避難してきているんだからこうしてくれるでしょうみたいな、モチベーションの人が、割と、多いらしくって。それでは何か、結構うーん、まあ、愚痴ではないですけど、まあ言ってみましたね。」

「施される側が、うーん、個人個人でいろんな意識があったから、なんかその、それで当たり前、困っているからっていうのが、なんか、ちょっと違うんじゃないって、なんか。」

「でも、もう、なんだろう、差別用語が生まれてたかも。なんか、その、浜の方から来た人は、家の中では避難民って呼ばれていて。なんか、うーん、話しても『避難民がよお』みたいな。まあ、なんだろう、良いところだけに目がいくわけじゃないじゃないですか、だから目に留まったことだけについてしまうから、避難民が、うんちゃらこうちゃらっていうふうになってしまっていたんで。それがもう当たり前、親が呼んでるから、周りも呼んでるし、というのはあったんで。なんか若干のマイナスイメージのまま固まっていたのかなあ。避難してきているから、病院とかもそのまま来ちゃうから、避難民が来て仕事が増えたとか、あっち

「うーん、その頃には、なんかもう福島って言うだけで差別があるよっていう報道とかあったのは知ってたので、(修学旅行で関東に行くのは)まあ、割と怖かったかな。なんだっけなあ、(関東のテーマパークで)福島ナンバーの車のタイヤに、タイヤがパンクさせられているっていうニュースがあって、なんかまあ、私たちがなりたくてなってるわけじゃないことに対して、差別がまあ、その、変な情報で差別が生まれて、生きづらい、生活、生きづらい環境になったことに対しては、すごく、複雑だった。ちがうんですよって私たちが言っても意味がないことだし、だからといってぶつけようもなく。なんか町の人とか、いっぱいこう学生が歩いていて、どこからきたのって聞かれる時があったので、その時にまあ、一瞬気を張ることもありましたね。でも実際に、体験することはなかったし、言う時点でもう気を遣っていたので、あまりなかったんですけど、でもやっぱり怖いっていうのもありました。福島から来ましたよって言えないあって。まあ、放射能が出ちゃったっていうことに対しては、困ったけど、でもその、なんか、電力の、なんか作るところがないと、今まで生活してこれなかったことを考えると、なんか本当になんか、一概にその全て悪いとは言えないのかなって。ただただ、他のところに行ってみると生きづらかった。」

【還元の結果】

確証のない風評が広がったことで関東で起こった事件に対し、やるせない思いだった。子どもである自分たちが何を主張しても報われないという諦めを感じていた一方で、やるせなさが解消されず、もどかしい思いだった。

福島県というだけで差別が起こっているという事態に、県外へ出ることへの恐怖を感じていた。放射能漏洩に対しての問題意識はあったが、原子力発電所無くしては生活に必要な電力を賄えなかったことを考えると、一概に原発の存在を否定できなかった。しかし、県外に出てみると原発に関する風評への恐れから心労し、生きづらさを感じた。現地の人たちにどこから来たのと聞かれるたびに、緊張し、福島から来たとは言えなかった。

(2) 高校入学後についての語り

「なんかその、あの、箸の話もあったし、まあ割と浜のほうは、治安が良くないっていうのは聞いてたんで、まあ実際なんとか組とかなんとか団とかあるっていうのは聞いてたんで、怖い、まあそういう治安的な意味で怖いのはあったけど、まあその、なんだろう、その場所において過ごしてる子ってどういう気持ちでいるのかなーとか、自分の家に帰れないって、どうなんだろうっていうのがあったんで。なんか、うーん、できることがあれば、っていう気持ちはありましたね。」

【還元の結果】

所属していた演劇部の部長から、A町から避難して来た人々が移住する仮設住宅で、子どもたちと遊ぶボランティア活動の紹介があった。家族の愚痴や、元々治安が良くないといううわさを耳にしていたことから、A町の人々に対して怖いイメージを持っていた一方で、そのような地域で過ごす子どもたちの様子について好奇心を抱いていた。

「こんなに元気いっぱい、だから何か心の奥底にどういう気持ちがあるのかまでは踏み込めなかったけど、なんか本当に元気いっぱい、もう遊ぼう遊ぼうみたいな、感じだったので。最初の頃は男の子たちに蹴られて、痛い痛いみたいな、殴られたりとか、腕噛まれたりとか、そういうことあったりけど。でも最初の頃はどういう気持ちなんだろうとか、会話も割と気を遣うことが多くて、しちゃいけない話もきつとあるんだなあと、あったので、すごい考えてはいたんですけど。」
「なんだろう、やっぱり時間が経つにつれて、角が削れていったというか、どうなんだろう、思春期に入ったからなのか、過ぎていたからなのかもあるかもしれないけど、暴行が減った。殴ったり蹴ったりっていうのが。まあ女の子もそうだったじゃないですか、殴ったりとかもあったので。なんかそう思うと、なんだろう、居場所にはなっていたりとか、してたんじゃないかなって思いましたね。なんか、何回も会うにつれて、なんだろう、私に会って笑ってくれたり、手を振ってくれたり、私にずっとついてきてくれたりするのが増えたので、なんかそう考えると、その子たちの居場所を作ってるっていうのもあるけど、なんか、作ってる側も居場所にもなってる、同化していくっていうか、なんだろうなあ、あったかいとは思います。」

【還元の結果】

実際に参加してみると、予想に反して、活発な子どもたちの勢いに圧倒された。子どもたちから暴行を受けることもあり、関わり方に戸惑いを感じていた。子どもたちとの会話では、心情を想像して触れてはいけない話題もあるのではないかと懸念し、接し方や会話に臆していたため、根底の気持ちまでは踏み込めなかった。ボランティアへの参加回数を重ねるにつれて、子どもたちが自分に笑いかけてきたり、ついてきたりする様子から、距離の縮まりを感じていた。子どもたちの居場所をつくることができていると感じ、自分の存在意義を見出すことができたと同時に、周囲と打ち解けたことで、自分としても安心できる場となった。

「や、うーん、なんだろう、うーん。変わっても、全体的に認識が薄れてきていると思った。まだ完璧に戻った訳ではないけれども、まだやっぱり戻るかどうかわからないっていうのが、戻れないっていう人ともいる中で、そのどンドン意識が薄れていってる。」

【還元の結果】

A町の子どもたちと実際に関わる中で、故郷に戻れない人々がいる一方で、世間の意識が風化していることに対し、やるせなさを感じるようになった。

(3) 【調査対象者 e】の経験からの考察

自身も経験したことのない事態に困惑している状況下、身近な施設が避難所となり、家族が実際に避難してきた人々と関わるなど、避難を受け入れる側の立場となったことに困惑している様子が見え始める。震災発生時の支援として、子どもたちが自分のペースで普段の生活を取り戻すことが重要であると言われていた¹³⁾¹⁴⁾が、日常が急変した事態を受け止めきれないまま避難してきた人々を受け入れる立場となった。さらに、家族から避難してきた人に関する愚痴を日常的に聞くこととなった。辻内の調査では、原発避難と関連したはじめの現象が子ども社会に限ったことではなく、大人社会にさらに広く蔓延していたことが報告されている¹⁵⁾。身近な大人の言動を見聞きしたことが、自身も好ましくないイメージを持つことにつながっていった過程が見え始める。

一方で、高校生活の中で、子どもたちへの好奇心から参加したボランティア活動では、子どもたちとの直接的な関わりを通して、避難してきた人々への認識が変化していった経験が明らかになった。さらに、子どもたちとの距離の縮まりを感じるとともに、子どもたちの心が安定していく過程を実感し、ボランティアへの参加が自己有用感の育成につながったことも示唆された。

3. 【調査対象者 f】の経験

〈プロフィール〉

- ① 性別：女性
- ② 家族構成・同居の親族：父、母、本人、妹（小学生）、祖父
- ③ 語られたストーリーの背景：

震災発生当時、自宅で妹と祖父とおり、当日中に自宅で家族と合流できた。居住している地区ではライフラインへの影響はなかった。通っていた中学校は、元々転出入の多い学校であった。中学3年生に進級した際、クラスに数名原発事故により避難してきた生徒が転校してきた。そのうちの一人とは、同じ陸上部に所属することとなった。

高校は総合学科のある高校を選択した。高校1年生の時に仮設住宅の実物を目にした。まわりの大人たちの間では、建設に対し異論の声が上がったり、うわさ話がされたりしていた。部活動では、A町から避難してきた後輩が一人いた。修学旅行は関西に行ったが、友達が現地の高校生に「放射能でしょ」と言われた。

(1) 震災発生以降の中学校生活についての語り

「なんかニュースとかで、テレビでニュースとかで言われるようになって、津波っていうのになって、なんだろうBはないだろうけど、やっぱなんか浜のほうでは大変なんだろうなあというのがすごいあって、ありましたね。大きな地震が来て、家族も無事だから良かったと思ってる矢先にニュースで津波の事を見て、同じ福島県でも津波の被害に遭っていると知って辛くなりました。」

【還元の結果】

内陸部であるB市は津波の危険はないと思ったが、県内の浜通り地区のことが気がかりだった。その後、ライフラインが止まることはなく、不便のない生活を自宅で送ることができたが、浜通地区の津波による甚大な被害を考えると、胸が痛んだ。

「あー、あ、でもなんか転校して来る前に、なんか、その、お友達が来たよっていう感じで、結構、なんか転校生が来たよっていうより、かみくだいた感じで言われて、なんか、来たのはその震災があって避難してきた子なんだけど、っていうの最初に言って、でもなんかみんな結構、先生そこで何か言いたかったみたいなんですけど、みんな結構震災関係なしに誰か来たんでしょ、早く紹介してよっていう感じだったので、生徒が結構受け入れがすごい方だったんで。」

【還元の結果】

中学3年生に進級した際に、クラスに原発の被害があったC地区から数名転校してきた。担任からは、震災で避難してきたと紹介されたが、言いよどんでいる姿にもどかしさを感じ、震災は関係なく転校生がどのような子であるのかという好奇心を抱いていた。

「なんか、合宿も、その子すごく足が速くて、期待されていたんですけど、なんか、お金がかかるから合宿は行かないって言うていたり、あの今はその震災後で

避難してるから、あのジャージとかあの故郷のジャージがいいって、中学校のジャージがいいって言ってそれ着てたりして。その子には合宿私たちが来て欲しかったので、みんなでお金集めたりして、あるから行こうって言ったり。」

「でもなんだろう、私たちの親とかは、結構普通に、まあ着てるけど子どもだからそんなにあんまり詮索しないでおこうっていう感じで言うてたんですけど、でもやっぱり近所のお年寄りの方とかが、結構、やーでもあの子たちA町なんだろうっていう感じでこう話してて、そうですね。なんかそれを聞いたときの、その一緒にいたときによくその話とか、結構大人が周りしてるのを聞いていたりして、それが私たち結構嫌で、なんか、ウインドブレーカー、暑い夏の時期だったんですけど、これ着なとか言っ、自分たちの学校名の入ったウインドブレーカー貸したりとかして。そうですね。」

【還元の結果】

A町から避難してきたクラスメートは、同じ駅伝部に所属することになった。「お金がかかるから合宿にはいかなない」と言っていたり、故郷の中学校で使っていたジャージが良いと避難後も着用していたりした姿を見て、はじめは腑に落ちなかった。一方で、その生徒はとて足が速かったためチームに加わって、練習と一緒に参加し、早く自分たちの中になじんでほしいという思いがあった。部員と共に何とか合宿に参加させてあげたいと、合宿費を集めることに奮闘した。

近所の年配者をはじめとし、地域の人々がA町の名前に入ったジャージを見て、避難してきたことに関して後ろ指を指している様子に、嫌悪感を抱いた。目の前で、その生徒が大人たちに悪口を言われている様子にやりきれなくなり、夏の暑い時期であったが、自分の中学校名の入ったウインドブレーカーを貸し、その生徒をなんとか守ろうとした。

「2、3人引っ越してきてたんですけど、その子以外の子たちはあんまり馴染めてなかったみたいで、すぐにあの引越し、してっちゃって、うちも何か、その子たちはなんかよそ者がお邪魔してるからごめんねっていう感じで、通っていた中学は結構荒れてた面があったんで、人の出入りがあったので、私たちは全然気にしなかったんですけど、その子たちは気にしてるみたいで。えっと、避難で言うよりも全然、普通に転校っていう感じで、私はそのままで欲しかったなあっていうのはあったんですけど。結構クラスとかでもみんな受け入れている感じだったんで、はい。他のクラスからもみんな、遊び行こうとか、勉強一緒にやろうっていうふうに結構、みんなそうですね。仲いい感じだったんで、はい。」

【還元の結果】

元々通っていた中学校では生徒の転出入が日常茶飯事であったため、生徒たちは、原発事故の影響で避難して

きたことに関して、取り立てて気にすることはなく、友好的な雰囲気であった。一方で、避難してきた生徒たちの、「なんかよそ者がお邪魔しているからごめんね」という遠慮している様子に、身構えず自然体でいてほしいと思っていた。

「A町からも、いたんですけど、その子クラスが違って、部活も、あの中3の時期だからもう何も入らないってことで、修学旅行とかもあったんですけど、なんかやっぱちょっと居づらいから行かないって言って、女の子だったんですけど、結構なじめてない感じで、あの子がもうなんか夏休み前には引越しちゃって。うーん。みんな話しかけには行ってたんですけど、なんかやっぱ1人でずっと座ってたり、話しかけに行くと話してくれるんですけど、廊下で喋って、おはよーとか言って、はよって返してくれてそのまま、おいでって言っても、や、いいやって感じで。そんな感じですね。」

【還元の結果】

A町から転校してきていた他のクラスの女子生徒は、部活も入らず、修学旅行も居づらいから行かないというなど、馴染めていない様子であった。他の生徒たちが働きかけを行っていたが、輪に入ることはなく一人で座っている姿が気がかりだった。積極的に声をかけるよう心がけていたが、挨拶は返ってきて、一緒に話そうという誘いには、「や、いや」とそっけない態度であり、二線を引いて歩み寄ろうとしない様子を不服に感じていた。

(2) 高校入学後についての語り

「中高一貫校だったんで、はい。それで中学生の子たちともちょっと関われるかなというのもあって。あとやっぱその、A町から来てる子たちで結構中学、進学する子が多いっていうのは聞いていて、なので、なんかその、すごいその中3のときにすぐ転校してちゃった女の子が、すごい気になっていて、そういう感じの子がいたら話しかけたいなっていうのがあって、それで結構中学生も、関われる授業が何個かあったので、それで（高校に）入ってみたいと思ったかな。」

「私が、なんか軽く逆ナン、ナンパしてんのかって感じだったんですけど、こう図書館で本一人で本読んでたところに、何読んでんのーって、急に話しかけてびっくりされたことも多かったんですけど。ふふふ。それおもしろいよねーって感じでいくと、びっくりしながらも、そうですねって話してくれたり、あと購買とかで、何を買おうか悩んでると、その最初話しかけた子が、これ美味しいですよとか、友達と一緒に来てくれたりとか、その友達からどんどん広がっていったりとか。あと同級生の弟とか妹とかがいると、その子としゃべって、それでその友達からっていうのが多かったですね。卒業のころには、いろんな子としゃべるようになって、卒業式にはおめでとうございますって言うてくれたりして、嬉しかったりしましたね。よく話せる、よく知らない子に話しかるねって言われたりとかもし

たんですけど、私の結構いろんな人と話したりも結構好きだったり、私があんまり人見知りをしないので、結構あっちこっちに話しかけちゃったりすることが多いので、まあそれがあんだだよなってよく言われました。あははは。」

【還元の結果】

周囲となじみずすぐに転校してしまったA町出身の女子生徒のことが心残りであったため、そのような中学生の力になりたいという思いを強く持っていた。一方、その学校の中等部は、A町から避難してきた子どもたちが多く入ってくるという話を聞いていた。中学生と関わることのできる授業などを通して、避難してきている孤独な状況の生徒と関係を築き、後悔の念を晴らしたいと思っていた。

高校入学後は、図書館で一人で読書をしている生徒に積極的に声をかけるよう心がけた。次第に、以前話しかけた子から声をかけてくれるようになり、自分が心がけていたことが報われたと感じた。周囲からは、面識のない中学生に、いきなり話しかけることに関して奇異の目で見られることもあったが、周囲にどのような印象を持たれようとも、一人である子に積極的に話しかけ、支えになりたいと思っていた。

「A町から来た子も何人かいて、いたいたんですけど、その子たち中学校もB市で過ごしてた子たちで、そのままどこ中出身ですって言って、わざわざA町から来たよーっていうのとか言わない子たちが多くて、A町から来たっていう子は、本人から聞かないことが多くて、生まれはB市じゃないんだーとか、たまにじゃあどこなのーとか聞くと、A町なんだっていうのとかわかることがあった、ありました。私は地元を誇りに思っているのになと思ってました。私自身、B市が地元だと誇りに思っているんで、原発があったとしてもA町出身を恥じる事ではないと思いました。」

【還元の結果】

B市の中学校に転入していたため、高校ではあえてA町出身と言わない生徒が多かった。A町出身という話は、本人が切り出すのではなく、「生まれはB市ではない」という発言に対して、会話の流れの中で自身が、どこの出身であるか質問したことにより、明らかになることがあった。自身は地元B市を誇りに持っていたため、A町に関して恥じて隠すのではなく、同じように故郷を大切にしてほしいと思っていた。

「や、私は結構、B市に、確かにA町から来て大変な面もあるだろうけど、B市に住んでくれたら嬉しいなっていうのはあって。私自身、結構、B市が好きで、歴史もいっぱいあって、すごい好きなんですけど、でもやっぱ、なんだろう、Aの方って雪降らないじゃないですか、それが大変だから引越すって言う子も、中学なんですけど来た中に何人かいたりして、なので、Bは好きなん

「ただその雪は、っていう子は結構いて、引越すの結構聞いてたんで、なので雪はあるけどいいとこなんだよっていうのも結構知って欲しかったっていうのはありますね。」

「なんか結構やっぱ(仮設住宅を)作りすぎじゃないっていう声は聞いたことがあります。そんなあちこち作ってどうすのとか、結構震災が起きてからあちこちでマンションとかもBでも結構増えてきて、結構マンションがあったところに実は田んぼが前あったとか、あとすごいあと少数しか行ってなかったけど、馴染みの駄菓子屋さんがあったとかっていうところを壊してアパートができるっていうのが何箇所もあったので、大人たちはちょっとそれに対して、ちょっとそこは潰さなくていいんじゃないのという批判はあったんですけど。うーん、それにあんまり思わない人たちは、別にいいんじゃないここにできてっていう、その駄菓子屋さん別の場所に、ちょっと、違うふうに移動してやってもいいし、田んぼだってまだ空いている開拓されているところあるしそこでやってもいいんじゃないっていう感じで言っていて。子どもたちは結構誰々が近くに来るから作って欲しいっていうのはありましたね。もちろんここに立ったら僕んちからこの子んちが近いんだよって言うのとか、言っていましたね。」

【還元の結果】

仮設住宅のみならず、アパートやマンションの建設も急激に進められており、大人たちの間では、造りすぎではないのかという異論の声があった。田んぼだった場所や、昔馴染みの駄菓子屋があった場所等を、取り壊して建設されていたため、大人たちの間では、批判もあった。一方子どもたちは、友達近くに住むことになるため、仮設住宅や、集合住宅の建設を歓迎していた。自身は、中学生の時に、雪の降らないA町出身の友人が、雪深いことによる生活の不便さから、引越してしまったことについて、残念に思っていた。雪は降るが、歴史もあり、魅力的な街であることを知って欲しかったという心残りがあった。そのため、仮設住宅を目にした時には、冬の生活面の不便さは理解しつつも、大好きなB市に住んでくれたら嬉しいと思っていた。

「部活内…後輩にひとりいて。でもその子は震災を関係ないって感じで、僕はAから来たんだって言って普通に、Aから来ましたっていうふうに堂々と言って、でなんか、その子の自己紹介ですごい印象だったのが、Aから来ましたって言って、でなんか、僕がAから来てその、放射能とかも心配で話したくないって人は、話しかけないでいいです言っていて。自分からなんかこう、後から言われるのが嫌だっていうのは言っていて、自分から結構、そういうふうに、カミングアウトっていうか、言っていて、家も原発の近くだったんでとか、後から聞いて答えるよりは、言った方がいいっていうのは言っていて。テニス部のそんなの関係なしに過ごしてたんですけど。」

「なんか、私、なんか、修学旅行、高校の修学旅行に、あの、Bからきたって言ったら、なんかあの放射能でしょ言われて、現地の高校生に、友達がいわれて、なんか、なんでそんなの気にするんだろうってすごい私は思いながら、そのとき喧嘩みたいになっちゃったんですけど。私はそれを言われたのを思いだして、でも、放射能とかそんなに、人の体にそんなずっとついてくる訳でもないし、ついてきたとしても、その、子の子自体に、影響がないなら周りにも影響がないから、気にすることはないんだよってっていうのはずっと思っていて。」

【還元の結果】

高校で所属していたテニス部には、A町から避難してきた後輩が一人いた。自分が避難してきたことに関する引け目は感じていない様子であり、A町出身であることを堂々と公言していた。実家が原発の近くのため、放射能が心配で話したくない人は話しかけなくて良いと言い放つ、攻撃的な態度に衝撃を受けた。詮索されるのは嫌なため、初めに自ら言った方が良いという言い分を聞いた。修学旅行の際に、現地の高校生から友人がB市から行ったことに関し、「放射能でしょ」と言われたため、偏見を持たれたくないと憤慨し、喧嘩になった経験が思い起こされた。放射性物質は人の体に常に付着しているものではなく、また付いてきたとしても、その子自身の体に健康被害がなければ周囲にも影響がないため、気にすることはないと伝えなかったが、攻撃的な態度に臆し、伝えることはできなかった。

「なんか大人に多いですけど、そのやっぱ、お金、原発の資金とかでもらってるんでしょとか、働いてないんでしょとか言う人がいるんですけど、いくらお金をもらってても、故郷にはもう帰れない方もいるわけで、その考え方を改めてほしいって言うのと、あとできればその、Aの方から来た方たちに、何か、自分Aだからとか、よそ者なんだっていう考えがなくなってほしいなって思いますね。」

【還元の結果】

テレビで義援金に関して報道されたのを機に、街に家が建てられる光景について、大人たちの間でA町の人々は働かず義援金で家を建てているといううわさが広がった。教師からも、新築されていく家について、義援金が使われていると話を聞いた。震災により元の家に住めなくなり、故郷に帰ることのできない友人が身近にいたため、大人たちの態度に嫌悪感を抱き、考えを変えてほしいと思っていた。一方で、避難してきた人たちに、A町にコンプレックスを持ったり、よそ者だと感じたりせず、心を楽にして気兼ねなく過ごしてほしいと思っていた。

(3) 【調査対象者 f】の経験からの考察

避難してきた転校生の紹介の際、担任教師が言いよど

んでいる姿にもどかしさを感じている様子が明らかになった。教師からは「どこから転校してきたか」や「どこから避難したか」などといったことを話題にはできないという声が多数聞かれたという報告もある¹⁶⁾。学校は避難してきた子どもと、元々その地区に居住している子どもが最初に接する場となり得る。相互の様子を見極め、出会いの場を設定する必要があると考えられる。

平時においても、何らかの特徴を持つ「異集団」はいじめの対象になりやすく、災害時には平時よりリスクが高いと認知され、不安が高まりやすいとされている¹⁷⁾。避難してきた子どもが合宿へ参加しなかったり、故郷の中学校で使っていたジャージが良いと避難後も着用していたりした様子や、積極的に声をかけてもそっけない態度であり、一線を引いて歩み寄ろうとしない様子について、同調しようとはしない振舞いを感じ取られ、腑に落ちず不服に感じたことにつながっていたと考えられる。

一方で、修学旅行で身近な友人（B市）が現地の高校生に差別的な扱いを受け、偏見を持たれたくないと憤慨した経験も語られ、避難してきた人への感じ方の変化に影響を与えたことが推察される。さらに、避難してきた友人とともに過ごす中で、友人が大人から目の前で悪口を言われたり、なじめずに転校していった同級生がいたりした経験から、周囲の差別から避難してきた人を守り、孤独感を解消する力になりたいと考え方が変化していった過程も明らかになった。また、自身が充実した学校生活を送っていたことや、元々住民同士のつながりが強く、伝統ある地域に居住していたことなどが、避難してきた人々に対して、地元でコンプレックスを持たず気兼ねなく過ごしてほしいという感情につながっていたと考えられる。

V. 総合考察

調査対象者3名の経験は、固有のものであり、個々の価値観及び人生観に基づき語られたものであった。その中でも、共通して身近な大人たちの差別的な発言を見聞きしていたことが明らかになった。【調査対象者d】からは、親戚が「税金もらって生活するのだろうな」と発言していたこと、【調査対象者e】からは、実際家族が仕事を通して避難してきた人々と関わり、具体的なエピソードや愚痴、差別用語を耳にしていたこと、【調査対象者f】からは、近所の人が目前で避難してきた友人の悪口を言っていたことなどが語られた。避難区域内に居住していた人々が多額の賠償金を受けた一方、避難区域外に居住していた人々は、ほとんど賠償金を得られなかったことが報告されている¹⁸⁾。原発付近の市町から避難した人々を対象として行われたアンケート調査では、「心無い言葉をかけられたり、精神的な苦痛を感じることをされたりした」と回答した359名のうち、賠償金に関することが82.5%、避難者であることが58.8%、放射能に関することが36.8%、原発に関することが26.5%であったことが明らかになっている¹⁹⁾。【調査対象者e】は自身が直接避難してきた人々と関わる機会がなく、身近な大人である家族からの情報が先行し、好ましくない印象を持つことにつながっていた一方、【調査対象者d】

と【調査対象者f】には中学校に転校してきた友人との直接的な関わりを通して、自分の基準で判断し関係を築いた様子が見ええる。直接関わる場を意図的に設定することは容易ではないが、常に事実に基づき子ども自身自身が正確な知識を獲得する機会を提供することが、大人の判断基準や世評に惑わされることなく自己決定していくうえで必要であると考えられる。

一方、避難してきた人との関わりの中で、本音を伝えられなかったり、接し方に戸惑ったりした様子についても語られた。【調査対象者d】からは、避難してきた友人が地元に戻る際、友人の立場を想像し、一緒に過ごしたいという本音を打ち明けられなかった経験や、自己紹介で出身地の話題ができた際に言いづらそうにしていた生徒の様子から、深く聞かないよう心がけたという経験、【調査対象者e】からは、ボランティアを通して避難してきた子どもたちと関わる際に、触れてはいけない話題もあるのではないかと懸念し、接し方や会話に悩んだ経験などが語られた。関係を築くにあたり、避難してきた人々の心情を想像し、深く関わることへの躊躇につながっていたことが推察される。

【調査対象者e】からはB市の人々も平常心を保てず切迫した毎日を過ごしている中、避難を受け入れる立場となった戸惑いも語られた。一方【調査対象者f】からは、B市が歴史のある町であり、誇りを持っていたこと、まわりの大人たちは仮設住宅の建設に反対していたことが語られた。また、調査の中で3名とも仮設住宅が建ち始めたことについて言及している。伝統ある自分たちの町の景観が変化していくことへの戸惑いもあったと推察される。被災の程度に差はあるものの、受け入れ側の人々も少なからず被災者である。程度ではなく被災の有無を考慮し、戸惑いに寄り添うことも必要であると考えられる。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、懐古的な語りを研究データとしており、実際渦中にいたときの思いとの隔たりが生じていることは否定できない。また、研究対象者が少数であることから、今後その人数を増やし、さらなる理解を深めることが必要とされる。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査対象者としてご協力いただきました皆さまには、本研究へのご理解と多大なご協力をいただきました。本研究に際しましてご指導・ご協力を賜りました皆さまに心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 福島県災害対策本部：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第1781報）、令和3年10月5日 Available at: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html> Accessed October 23, 2021

- 2) 福島県大熊町：大熊町震災記録誌 福島第一原発，立地町から，平成29年3月
- 3) 前掲1)
- 4) 経済産業省 資源エネルギー省：あれから10年，2021年の福島の「今」，2021. 4. 2 Available at: https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/fukushima2021_01.html Accessed October 23, 2021
- 5) 朝日新聞デジタル：原発避難先でいじめ 生徒手記，2016. 11. 16 Available at: <https://www.asahi.com/articles/ASJCH5GJYJCHULOB02P.html> Accessed October 23, 2021
- 6) 毎日新聞：横浜・原発いじめ，2016. 11. 23 Available at: <https://mainichi.jp/articles/20161124/k00/00m/040/070000c> Accessed October 23, 2021
- 7) 毎日新聞：体操着バケツで汚され…原発避難の小学生，いじめのその後，2021. 4. 19 Available at: <https://mainichi.jp/articles/20210418/k00/00m/040/222000c> Accessed October 23, 2021
- 8) NHK：震災6年 埋もれていた子どもたちの声 ～“原発避難いじめ”の実態，2017. 3. 8 Available at: <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3947/index.html> Accessed October 23, 2021
- 9) 文部科学省：児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 Available at: https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm Accessed October 23, 2021
- 10) 佐久川肇，上田嘉好子，山本玲菜：質的研究のための現象学入門 対人支援の「意味」をわかりたい人へ第二版，医学書院2013
- 11) 前掲10)
- 12) トム・ギル：福島第一原発事故避難者の研究（最終報告）突然の追放 突然の富：福島原発貴族，明治学院大学国際学部附属研究所研究年報23, 79-95, 2020
- 13) 日本臨床心理士会：こころに寄り添う震災支援，金剛出版，2017
- 14) 繁田佳子 大野かおり：震災による子どもの心理的影響と家族のサポート状況との関係，神戸看護大学紀要9, 85-91, 2005
- 15) 辻内琢也：原発避難いじめと構造的暴力，科学88, 265-274, 2018
- 16) 内山登紀夫：災害といじめ 東日本大震災後の福島をめぐるいじめとコロナ禍，精神医学63, 187-197, 2021
- 17) 前掲16)
- 18) 前掲12)
- 19) 前掲15)